

共同研究報告

多摩大 SMIS 発・問題解決学コンテンツの整備 ならびに構築のための研究：問題解決学の構築プロジェクト

共同研究メンバー

出原至道（経営情報学部）、下井直毅（経営情報学部）、○豊田裕貴（経営情報学部）、
中庭光彦（経営情報学部）、
（○代表、執筆者）

1. はじめに

経営情報学部では、問題解決力を大学時代に身に着ける重要な基本素養のひとつと位置づけ、問題解決学総論（入門）という科目を設置している。この科目は、毎回異なる教員が、それぞれの専門分野に関連付け、問題解決とは何かについてオムニバスで進められているが、以下、二つの視点から外部発信しうるコンテンツとして保存し、発信すべきという試みがなされている。

第一は、2 年生必修科目のため、一クラスに全ての学生を集めることが出来ず、二クラス展開していること。そのため、受講クラスによっては、もう一方のクラスの講義を聴くことが出来ず、これを補完するために、受講者以外の学生も内容を学習できるようにコンテンツを公開すべきという理由である。

第二は、これら問題解決事例を中心にした（基本的に）全教員が担当するコンテンツは、学外への多摩大学経営情報学部の魅力をアピールする上でキラーコンテンツになるという判断理由からである。

これらの点に鑑み、本共同研究は、多摩大学経営情報学部から問題解決学コンテンツを発信する為のインフラ整備ならびにその方法の構築を目的とする。

2. 動画によるコンテンツ配信の問題点

当初、これらコンテンツを録画し、WEB を通じて動画配信する仕組みを導入した。具体的には、Adobe 社の Connect を検討していた。これは、動画を単に録画し配信するだけでなく、講義メモや資料を同時に画面上に表示でき、さらに、チャット機能を利用し、インタラクティブなやり取りが可能な方法での講義配信であり、魅力的な発信方法に思われた。

ただし、通常の講義をそのまま配信するには、いくつかの問題があることが明らかになった。

ひとつは、保存され繰り返し閲覧されるコンテンツを前提とすると講義がしにくい

（原稿受理日 2013.10.30）

という意見である。たしかに、資料への記載も板書もせず、一意見として伝えたいことなどは、WEB による配信に抵抗があるだろう。

つぎには、著作権の問題である。テキストを利用した場合など、教室を離れた一般に配信した場合に問題になるという指摘である。

第三には、講義である以上、学生を注意することもあり、それを録画されては配信に適していないというものである。

もちろん、これらの問題は、録画後に適切な編集をすれば、解決する問題ではあるが、次々に録画される講義コンテンツを随時編集することは現実的ではない。

それ以外にも、講義を 90 分まるまる（問題解決学の場合には 60 分）配信しても、受講側が集中できないなどの問題があり、当初想定した動画配信ではない方法が模索されることとなった。

3. 講義の実況中継によるコンテンツ配信の可能性

これら動画配信の問題を解決すべく、コーディネーターが講義を受けつつ、Twitter ならびに Facebook で随時ポイントを配信するという方法を試みた。この方法は、実況する担当者のスキルによるブレが大きい、リアルタイムで臨場感があり、SNS を経由した広報戦略としても有効であること。そして、受講者が復習用として確認したり、それに対してコメントを付けられるといったメリットがある。

さらに、これらをまとめることで、そのまま講義実況レポートにもなり、そのまま HP 上に配信できるメリットもある。

これらの点から、2013 年度 B クラスでは実際にすべての回の内容をこの方法で発信した。文末に、まとめた講義実況レポートの一例を付したので参考にさせていただきたい。実際には、これらを 140 字（Twitter の制約）ごとに配信するが、講義後簡単に手を加え、まとめるだけで、このレポートが完成する。

4. まとめ

すでに指摘したとおり、この実況によるコンテンツ発信は、発信者のスキルによる部分が大きい。この点をいかに解決するかが、長期にわたりこの方法を持続するための鍵となる部分である。

なお、今回、講義の録画コンテンツ自体は、コンテンツ公開には採用しなかったが、Adobe Connect による講義の録画と共有（配信）は、この実況レポートの作成に活用できる可能性がある。たとえば、実況をするメンバーを複数用意し、そのメンバーに限定した講義配信とチャット機能を活用する。それにより、分業しながら実況する為のコンテンツを作成することが可能になるであろう。

いずれにしろ、新たな試みが機能し、持続可能な方法に体系化できるまでには、課題が多い。この点を踏まえ、継続して研究をしていく必要がある。

(コンテンツ例：野田一夫：問題解決学総論（入門）：特別講義)

オムニバスによる問題解決学総論の B クラスの第 13 回目として、野田一夫先生がご登壇。冒頭から熱いメッセージが炸裂。この熱さは文字では伝えきれないですが、ポイントをまとめていきます。

<導入>

いきなり「メモなんて取るな。俺の顔を見て話を聞け！！」とがつん。「聞き手が聞く姿勢を示すからこそ、話そうと思うんだ」、と（この指摘が後の問題解決の話に繋がります）。まずは、なぜ大学があるのか、大学に通うのかについてから話がはじまりました。

私（野田先生）が、今までの人生で一番くだらないと思っているのは、「自分が大学で受けた講義」だ。大学というのは、本来、学生のその後の人生に直結しているべきものはずだ。それにも関わらず、当時の大学教員は、研究者面（ずら）して教員としての自覚がない人ばかりだった。そんなひとの話なんて心に響くわけがない。若者の人生に影響を与えないような大学は大学ではない。だから、あるべき大学、つまり教育に真剣に取り組む、卒業後の人生に影響を与えうる大学をつくったのだ。

<問題には 2 種類ある：> 話は、問題解決学に進みます。

問題は、大別すると二つに分けられる。自分一人で解決できる問題と、自分一人では解決できない問題がある。一人で解決できるような問題は、たいした問題ではない。みんなで取り組まなければ解けない問題こそ、解くべき問題だ。複雑な問題は、一人で解決するのは難しいからだ。

大きい問題を解決するには、たくさんの人間で解決を目指さなければならない。ただし、単に何人かが集めればいいということではない。各自が自分の力を発揮し、問題解決に参加していかなければならないのだ。

複数人で問題解決をする際、避けて通れないのが「会議」だ。ただし、日本社会では、若手・下っ端が発言できるような雰囲気はない。問題解決に貢献しろといっても会議では発言すらできないような土壌がある。

しかしそれではもったいない。若手でも問題解決に役立てると思うなら発言すべきだ。はじめは「なんだこいつは生意気なやつだ」と思われるかも知れない。しかし、何回も繰り返していけば、発言できる雰囲気になる。変わり者とは思われるかも知れないが、発言しないなら会議に参加する意味は無いだろう。

さて、何人かが解決を目指さなければならない問題は、どういうメンバーで解くべきなのだろうか。「三人寄れば文殊の知恵」というが、3 人が異なる視点、異なる能力がある人が集まるから知恵が生まれる。みんなが同じ考えのメンバーが集まったって知恵はでないだろう。

さらにいえば、たとえ多様なメンバーが集まっても、その人達が意見を表明しなければ、相乗効果は生まれない。だからこそ、会議では遠慮せずに発言すべきなのだ。

ただし、各自の発言に任せていては、生産的な問題解決ができない。せっかく有能

なメンバーを集めても、その能力が活用されなければ意味が無い。つまり、メンバーから意見や知恵を引き出せる能力（人材）が必要なのだ。それがチェアマンの能力だ。良いチェアマンがいれば、どんどん意見や知恵を引き出されるだろう。

（メモ）チェアマンが話や能力を引き出すように、聞き手も話し手から話を引き出す必要がある。冒頭にいった「聞き手が聞く姿勢を示すからこそ、話そうと思うんだ」ということがここに繋がります。

そして、チェアマンに必要な能力は、構想力と表現力とだと思う。まず、構想力だ。問題を解決したときにどのようなになっているかをイメージせずに問題なんて解けないだろう。問題解決には、その後の青写真がいる。これを描くのが構想力だ。

ただし、このイメージは共有させなければならない。目指すべきイメージなしでは、みんなで問題を解決することは難しいだろう。だから、表現力が必要なんだ。描いた青写真をいかに伝えるか、それなしに、複雑な問題は解決され得ない。

では、どうやって表現力を身につけるかだ。それは、自分の感性を磨くということだ。たとえば、優れた画があるとするだろう。その画は、いろいろなものを語りかけてくる。

たしかに本を読むという勉強もあるだろう。ただし、それだけでは感性は磨かれない。だからどんどん美術館に行ったりすればいい。東京にある大学に通っているメリットは、こういう感性を刺激する機会に接することが容易だということにもあるのだ。

若かりし日に受けた刺激とそれによって培われた感性（清純な気持ち）は、大人になっても忘れない。大人になって変なことをする人間は、こういう青春時代をすごしていなかったのだろう。そう考えると、みなさん（学生）は、それほど時間が残されているわけではない。表現力を一生懸命身につける努力をすべきだ。そのためには、学校にいないときの時間の使い方も重要なんだ。皆さんの時間は、大学にいないときの方が長いだろう。だとすれば、人生を通じて表現力を付けるべきだ。

〔以下、実際にはつづきます。つづきは以下の URL へ〕

http://www.tama.ac.jp/smis/smis_curriculum2.html に B クラスの全コンテンツがあります。この例は、野田一夫先生の問題解決学総論（入門）：特別講義です。